

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第41号 2001年9月1日

長宗我部信親の見た南蛮都市府内

大分市教育委員会
学校教育部長 秦 政博

日向遠征とその後

天正六年（一五七八）九月四日、大友宗麟は日向に向けて遠征軍を發した。自らも臼杵から大船で出港、北川河口の務志賀（無鹿）をめざした。目的は日向の地にキリシタン王国を建設すること。この年七月正妻と別れ新夫人を娶った宗麟は、臼杵教会で受洗ドン・フランシスコの教名を名乗るようになったことが王国建設への大きな契機になったに違いない。因みに務志賀の地名はラテン語ミュージカ（ミュージック）に由来したものである。

しかし、この企ては島津軍の大反撃に遭い甚大な敗北を喫した。大友五万の兵は三万に激減、敗残の兵の屍は山野に累々と残された。理想国の夢は字面のとおり、夢のままに消え失せたのである。あたかもこの後の大友氏の運命を指し示すように。

敗戦の衝撃はまず大友氏家臣団の中から噴出した。家臣たちは島津氏は神仏を敬い、宗麟はキリシタンになったことが大敗の主因と非難、怨嗟の聲は日増しにふえていった。離反の先鋒をきつたのが竜造寺隆信をはじめとする肥筑方面の諸将である。敗戦直後、隆信は筑後を攻め、これに呼応して蒲池、草野、黒木の士などが宗麟に反した。筑前でも秋月、筑紫が。そして天正九年（一五八一）頃には九州北西では竜造寺は一大勢力圏を保ち、九州のなかにあつて大友、島津と鼎立する。反宗麟の動きは身内

からも発起した。一族の田原親宏（国東の田原氏の惣領家）が謀反にはしり、ややしばらくあつて田原親貫（親宏の養子）が、そして田北紹鉄が反乱。いずれも身内、重臣たちであり、大友氏はまさに内憂外患、浮沈の瀬戸際に置かれたのである。が、そのような中にあつても、宗麟はキリシタンの徒であることを守りとおした。田北が背いた天正八年、臼杵にはノビシヤド、翌年には府内（大分）にコレジョを建立。ともに宣教師学校である。次の年には少年遣欧使節が発せられた。

南蛮造りの府内

さて、当時の府内についてである。今、県都であるこの地はその頃も豊後の都、それも南蛮造りの町であつた。町の規模は東西約七〇〇メートル、南北約二・二キロ。ダイウス堂と呼ばれる府内教会、日本最初の西洋式病院、また唐人町という外国人居住区などがある。町の中心には大友館、隣接して倉庫群。町は全部で四一町でほぼ長方形をなし、所要所に木戸や寺が配された。町には溢れるほどの南蛮の品々がみられた。ペトナム、ミャンマー、中国華南産陶磁器などが次々と掘り出されている。その多彩さは中世博多などのそれに勝るとも劣らない。備前焼きの大甕を十も備えた大商店の跡も見つかった。町の核をなす大友館は方二〇〇メートル、面積は四万平方メートルにも及び、室町將軍邸とほぼ同じ

広さである。この中に主殿や会所（接待所）があつたと思われる。ステータスシンボルである庭園は池をともなつて発見された。巨石を配した東西約六六メートルもの規模を持ち、西の京と称えられる山口の大内氏館をも上回る。池庭の一角からは京都風の土師器（盃）、茶臼、天目茶碗など茶道具類も夥しい数が出土している。主殿のものとおぼしき礎石の一部もみえてきた。二度は使われないという廃棄された無数の土師の盃に、賓客や家臣を相手に催された宴の数々を想像したい。府内はまことに京都ぶりの町であつた。

府内での信親

南蛮の都として輝いていたこの時代、しかし一方では日向遠征のあまりにも大きい深手ゆえに、宗麟時代の力と栄光は次第に衰えをみせていた。それを決定付けたできごとが勢力を増強し侵攻してきた薩摩軍との対決であつた。風雲つげる豊後情勢に天正一四年（一五八六）夏、宗麟自らの依頼もあつて豊臣秀吉は、長宗我部元親、信親など四国の士に豊後救援を命じた。こうして秋口には府内の地を踏んでいたであろう四国の面々が、南蛮商都の空気を存分に喫していたことは想像に難くない。この頃宗麟は津久見に住まい、臼杵城を本拠にして薩摩迎撃の体を構えていた。府内の主は宗麟の長子義統である。元親父子をはじめ主だった将は、大友館で池庭を前に義統の丁重なもてなしを受けたに違ひなく、出土の土師盃のいづれかがあるいは信親の口に運ばれたのかもしれない。やがて来る血戦を控えての安らぎの一時に身をゆだねた若武者は、師走の風のなかに散り行くさだめを知る由もなかつたのである。

企画展 「長宗我部元親・盛親の栄光と挫折」によせて

すべては戸次川から始まった

野本 亮

もし、あの時、信親が戦死していなかったら……。今回の企画展の準備中何度となく頭をよぎったフレーズである。

天正一四年（一五八六）天下人秀吉の命により、大友氏救援のため豊後に派遣された長宗我部氏親子は、大野川（戸次川）河畔で鳥津の大軍と激突し、お家始まって以来の大敗北を喫した。

戸次川の合戦と称されたこの戦いで、七百余名の将兵とともに、あろうことが長宗我部元親の嫡男信親が戦死してしまつたのである。

後世の歴史家達は、この事件を土佐史最大の悲劇として嘆き、信親を「悲運の武将」、殉じた将兵を「土佐武士の鑑」として礼賛してきた。

確かに合戦史上希にみる殲滅戦は、事件を知る者の魂を揺り動かさずには

おかないが、これまでやや叙情的に流されてきた感じが強いように思う。

今回、日本史上では局地戦の一つに過ぎない戸次川合戦の検証を展示の中心に据えたのは、合戦の顛末のみが注視されるあまり、見逃されてきた織豊期の南四国・九州の大名勢力の動き、言い換えるなら南海路上に領国を持つ大名間の情報網、中央政権との駆け引きといった、合戦に至るまでの経緯を具体化するという目標があったからである。

今思えば、土佐中世史研究の第一人者の秋澤繁氏が、開館五周年特別展「秀吉と桃山文化」図録（巻頭の筆者拙稿）を御覧になり、「降伏後の元親が必ずしも秀吉に従順だったとは思えない。『上井覚兼日記』（天正一四年の項）を読んでみなさい」とおっしゃられたことは、大変示唆に富むものであった。

鳥津氏や大友氏、さらにその重臣の面々が京文化の移植に熱心で、諸芸の達人を九州に下向させる際、土佐を経由して豊後へ、あるいは日向の港を通

り、薩摩に至るいわゆる南海路を利用していたことは以前から知られていた。また、織豊期、室町幕府や朝廷の要人が密命を帯びて九州に下向するときなどもこのルートはよく利用されていた。

例えば豊芸（大友・毛利氏）和睦の密命を帯び、元龜二年（一五七二）に將軍足利義昭の使者として豊後に向かった前右大臣久我晴通らが土佐を経由していることが史料（『薩藩旧記』）上で確認できるし、天正三〜五年（一五七五〜七七）九州に下向した近衛前久も、途中土佐の要港浦戸に立ち寄り、元親らと連歌等の文化的交流を持ったことが知られている（『三元親記』）。

上方から最新の情報を携えて来訪する使者を、経由地の領主として迎えた長宗我部氏は、否応なしに九州の諸大名と情報を共有できる立場にあった。

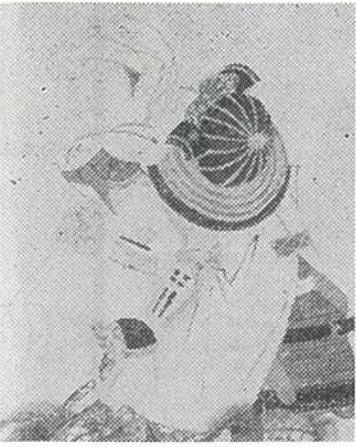
さて、土佐平定以後、元服した嫡男弥三郎（のちの信親）の烏帽子親を懇願したり、実弟香宗我部親泰を使者として安土に遣わすなど、信長に対する低姿勢を貫いてきた元親であったが、阿波を平定した天正一〇年（一五八二）、その領有をめぐってついに対決の時を迎えることになる。

ちようどこの年、鳥津義久の使僧善哉坊頼俊（日向総先達職）が長宗我部元親のもとを訪れている。善哉坊はさ

らに毛利輝元・足利義昭とも面会し、翌一一年二月に日向宮崎城主上井覚兼のところに帰還している（『上井覚兼日記』）。善哉坊は覚兼宛の元親書状を運んできた。その内容を知る術はないが、信長の四国・九州方面への勢力伸張を由としない両者が、あるいは結託して反信長的外交戦を展開していたのかもしれない。南海路は時に陰謀渦巻く謀略の路でもあった。

天正一〇年、織田信長が本能寺の変で倒れると、中央では羽柴秀吉らを中心に後継者争いが激化する。同一一〜一三年、四国では元親が讃岐を併呑し、さらに伊予の大半を手中に収めるが、九州でも鳥津家久（一六代当主義久末弟）が竜造寺隆信を討ち取り、肥前を奪取するなどの動きが見られた。そして、天正一三年に元親が秀吉に降伏すると、鳥津氏と長宗我部氏の関係は微妙に変化してゆく。

土佐に関する情報は、日向に駐屯する部隊と鳥津に内通していた大友氏配下の武将たちから、比較的容易に入手できていた。鳥津家久の補佐役であった上井覚兼の『日記』を再び見てみよう。天正一三年八月、鳥津義久は元親降伏の第一報を日向細島より入手している。元親の重臣谷忠兵衛と豊臣秀長の交渉の結果、停戦・講和に至ったのが七月二十五日であるから、いかに



伝長宗我部信親画像



アルタイムで関連情報を入力していか分かる。その後も逐一土佐の動きをマークしていたと思われる島津氏だったが、天正一四年八月、意外な歴史的事実が上井覚兼によって記録されている。

二度の上洛の結果、すっかり秀吉の器量に心酔した元親は「かよの君に身を委ねてこそ武士の本懐」(『土佐物語』)と述べたという。しかし、元親は、秀吉の停戦命令を無視し九州平定に邁進していた島津義久に対して、なんと大船を一隻贈呈しているのである。恐らく軍船ではなく商業用の大型船だったと推測されるが、何とも不可解なことをしたものである。

秋澤氏が指摘されたのはまさにこの

事例であり、これを元親独自の外交とみた場合、のちの戸次川合戦にいたる歴史的展開が随分違って見えてくる。

天正一四年の八月といえば、すでに豊後大友氏救援のための従軍令が長宗我部氏に対して発せられていたと考えべきで、そんな折りに敵に塩を贈るような行為、豊臣政権が察知すれば逆行行為とも取られかねないことを何故したのだろう……。歴史小説のようにあれこれと邪推するのは楽しいが、明確な答えを導き出すのは難しい。

ただ義久が直ちにこの大船を日向内海へ廻漕していることから、この段階での両者の関係はまだ敵対という状態ではなかったと考えざるをえない。

実際、同月頃から四国衆の上陸作戦が段階的に開始される訳だが、当初の長宗我部氏らの動きは対島津というより、救心力を失った大友宗家に代わって豊後国内の治安を維持することに終始していた感が強い。

また、府内の瑞光寺を本陣(『両豊記』)としていたという長宗我部元親・信親親子は、豊後イエズス会上長ペドロ・ゴメス師の訪問を受け、後には彼らの方から積極的にコレジオ(学院)を訪ね、要請があれば司祭や教会を援助できる用意があることを申し出たという。さらに元親の嫡男信親は、修道院で一、二度キリスト教の教

えを聞き、入信したい旨を告げたという。いずれもフロイスの『日本史』に記されていることだが、どうももう一つ元親らの行動に緊迫感を感じない。

土佐側の史料によれば、悲壮な決意を持って信親以下数千名の土佐兵が海を渡り、直ちに對島津作戦に従事したかのように記されているが、臨戦態勢に入るのは一二月下旬からであって、それまでの期間については、長宗我部氏親子が、独自の思惑により行動していた可能性がある。

島津氏は同年八月、上方勢軍監黒田孝高、吉川・小早川麾下の毛利勢がついに豊前方面に進撃してきたことを受け、この方面の部隊を肥後まで後退させている。その一方で仙石秀久に率いられた四国勢の監視を一層強化してゆく。『覚兼日記』八、九月の条には、日向細島の警備強化や大友氏一族志賀親益からの最新情報のこと、土持久綱・山田有信らからの仙石氏豊後着陣に関する事などが列挙されている。情報は完全に筒抜けだったのである。

ところで『日記』一〇月の条に、長宗我部氏の軍勢約二〇〇名が大友宗麟のこもる丹生島に現れたことを記している点は注目される。土佐勢の本隊は府内に駐屯していたわけだから、これは分遣隊とみるべきか。

「召し連れせうろう衆も、兵具等

然々帯びず、商人なと様の無分者と聞得候由也」とあることから、この二百名は元親もしくは信親に率いられた水主(商人を含む)の団であった可能性が強い。元親は、島津の降伏は時間の問題であり、豊後に派遣された機会を有効活用し、和平後に向けての人脉構築、南海路をフルに活用した九州、果ては異国南蛮との交易といった経済戦略を思い描いていたというのは空想が過ぎるだろうか。

南海路を使った交易の拡大と、後継者信親を無事帰還させ、中央政権の承認のもと一気に世代交代をはかるのが元親の構想だったとすると、一二月一二日の合戦は全く無用なものだったと言わざるをえない。信親が戦死していなかったら：そう考えたくなる所以である。

本展では、戸次川で夢がついえ、戸次川から新しい土佐のかたちを模索しなければならなかった元親の栄光と挫折の顛末を、新しい視点と残存する資料によって描いてゆく。

展示資料の五割は高知県初公開資料なので、この機会には是非御観覧いただきたい。

※本展は山内一豊入国四〇〇年共同企画事業です。内容面では土佐山内家宝物資料館の企画展「山内一豊その時代と生涯」と連携しています。

香崎 和 平 さん

今回ご紹介するのは、須崎市にお住まい

の香崎和乎さん（昭和二〇年生まれ）です。香崎さんには当館の資料調査員として開館前から協力いただいています。

平成一三年七月二〇日、香崎さんのご自宅を訪ね、お話をうかがいました。まずは蔵書の多さに目を見張りましたが、香崎さんは「自分はまだまだ少ない方」とご謙遜。また、出迎えてくれた屏風は、描かれた雀の愛らしさに惹かれて購入されたものだったか。香崎さんは日本画も嗜まれているとのこと、風流なお人柄が偲ばれます。

香崎さんは、中世史への関心から出発し、石造物の調査など、あくまでも須崎にこだわった地道な仕事を続けておいでです。須崎市役所に在職されて文化財行政にも長く携わってこられた香崎さんのお話からは、郷土、須崎に寄せる深い愛情がじんわりと伝わってくるのでした。



津野氏に魅せられて

私が郷土史に関心をもったのは小学校五年生の頃でした。須崎市池ノ内の花取り踊りのことを父に聞くと津野氏との関係を話してくれたのです。

それは、一条氏が津野氏の支城、岡本城を攻めた折、池ノ内の神祭を利用して美少年を踊らせ、城兵が見物に下りてきた際に落城させたという言い伝えでした。津野氏とはどんな武士だったのだろうか：子ども心に知りたいと思うようになりました。

高校生になって、津野氏の史料や系譜などが掲載されている『土佐国靈簡集』のことを知り、読んでみたいと思いました。発行された前田和男先生に手紙を出したところ、「高校生には難しい」とのことでしたが、わざわざ同書全三巻を送ってくださったのです。それから文献を集めはじめました。

津野氏は、葉山と須崎に城を構え、津野庄を領した武将です。永正一四（一五一七）年、津野元実が戸波城西（一五一七）年、津野元実が戸波城西北の恵良沼で一条氏配下の福井玄蕃に

破れ戦死し、天文一二（一五四三）年には大野見で津野基高が一条氏と合戦し、やがてその軍門に降りました。その後、長宗我部元親の三男、親忠が津野氏を継ぎますが、慶長五年（一六〇〇）年、長宗我部の家督を継いだ元親の四男、盛親らに殺されてしまいます。こうした悲劇的な最期や仁政のためでしょうか、土地の人々は津野氏を慕い、各地に津野神社が建立されました。

そのような土地柄ですので、津野氏の没落をもたらした計略と伝えられる花取り踊りが、他ならぬ津野氏の霊の供養のためであると説明されているのは、そぐわないような気もします。

津野氏については、その発生からして謎に包まれてはつきりしていません。津野氏は鎌倉御家人から出発した山ノ内氏と考えられ、執権に組みみて、浮穴郡から梶原に入ったのではないかと下村效先生によると承久の乱には関ヶ原の戦いのおきのように、在地の支配機構がゴツソリ変わっているはずで

さらに神社をみていくと、葉山を境に須崎側は賀茂神社、東津野側が三嶋神社というように割とはっきり分かれています。津野繁高は朝廷から備前守の官位をもらっています。その際に賀茂氏と結託した方がもらいやすかったのではないかと。それで葉山から須崎方面へ勢力を伸ばすことになったので

でしょうか。とは言え問題は残ります。神社の氏子関係は時代によって変動していくのですから、今の状況から言えることは推測の域を越しません。

また、義堂周信とともに五山文学の双壁として中央で活躍した禅僧、絶海中津が一族から出るなど、津野氏には何か文学的な教養が培われる素地もあったのではないかと考えられます。津野氏の魅力は単なる戦国武将ではない。そういった点にもあるようです。

文化財——未来への贈り物

須崎市役所に入って初代の須崎市文化財保護委員会々長だった岡本健児先生に出会いました。先生からは「文化財保護について勉強せよ」と教えていただきました。文化財は多種多様ですが、幅広く勉強しなければなりません。例えば、鏡を見せられたときに最低でもその年代がわかるくらいの知識が必要です。資料の位置づけができる眼をつくらうと励みました。

私が須崎市文化財保護委員として指定に携わったのは、大崎家や笹岡家の和鏡、鳴無地蔵堂と上分川西地蔵堂の鰐口、国見の阿弥陀如来坐像、上分大師堂の大日如来坐像、大浦太子堂の木造釈迦如来坐像、野見の潮ばかり、大谷の花取り踊りなどです。

また、文化財については、指定をす

ればそれで終わり、というわけではなく、その後の保護が大切です。県文化財保護指導員として、私も文化財パトロールを続けてきました。その中で鳴無神社の破損をみつめて報告し、同社の修理が成ったことは、貢献できたものと嬉しく思ったものです。

歴史館の坂本正夫館長と一緒に、バイクで昔話を集めていて日射病になったこともなつかしい思い出です。その成果は、『須崎市の昔話』という一冊の昔話集になりました。

また、野見半島の西南端の戸島からは、弥生時代の土器片や奈良時代から鎌倉時代にかけての生活用具が出土しています。地元には白鳳の大地震で黒田郡とともに海中に沈んだ野見千軒・戸島千軒のいい伝えもあり、野見湾を中心にして古代に集落が形成されていたのではないかと考えられています。この戸島遺跡は未発掘です。将来発掘するように置いておこうということ。未来の考古学者への贈り物です。

須崎の史料集をつくりたいという思いもあります。それもまた後世の研究者に役立ててもらいたいからなのです。

盛り沢山の須崎史談会

須崎史談会は、『須崎市史』に書ききれなかったものを引き続き会誌に書いていこうということで、昭和四七年

に発足しました。発足当時に私も会員になり、平成五年からは会長に就任しました。会長と言っても、会誌の編集もし、総会案内葉書の発送などの事務もする、なんでも屋です。会誌を年四回刊行するのでなかなか忙しいですよ。早く跡継ぎを育てなくては…と考えています。

会員は五〇余名でスタートし、現在四三〇名です。何故こんなに会員が増えたかといえば、市民の郷土に対する想いが強いからでしょう。けれどそれほどばかりに頼らず、史談会側からも働きかけています。

児童生徒に地域のことを教える学校の先生方には、特に会誌をとってもらいたいと思つて入会を勧めてきました。市役所の職員についても、課長級以上の人はまず入ってくれていると思えますし、案外、若い人も入ってくれているのが嬉しいですね。

須崎史談会が年二回催している史跡巡りも好評です。また、会誌の表紙には須崎の風景を描いた絵をカラーで掲載しています。失われゆく風景を絵で残していこうというこだわりなんです。

郷土の歴史を調べよう

須崎市立多ノ郷小学校では、六年A組の児童が郷土の偉人を調べ伝記を編纂しました。その名も『郷土の偉人』。

坂本龍馬をはじめ古屋竹原や智隆など六人の偉人についてそれぞれ冊子を作っています。私も教室に話をしに行き協力させてもらいました。

小学生が自分たちで市内外に出て調べる過程で、幾つか歴史を塗り替える発見もしたのですよ。

例えば、幕末に種痘法を学び、多くの人々の命を救った須崎の医師、豊永快蔵は、これまで父に大阪行きを反対されたとき父は既にしてしまったことを小学生たちは墓で確認したのです。反対したのは父ではなく家族の誰かだったのかもしれないですね。

それにしても郷土の歴史を自ら調べたり、偉人の生き方を学ぶことは、子どもたちにとってもいい影響を与えるものだと思います。

高知県の地域性を見せてほしい

歴史館に期待しているのは、ひとつのテーマを通じて高知県の全体像がわかるような企画展です。

民俗の展示で言えば、葬式ひとつとってみても県の西部、東部で違いが出るでしょう。例えば県東部の県境近くでは徳島県と同様の風習がみられるのではないのでしょうか。そうした地域ごとの多様性が資料から理解できる展示を見たいのです。そのためには歴史館

の企画展示室の狭さは何とかならないかと思えます。

また、はじめにお話した花取り踊りは、須崎の中でも、大谷では冠の飾りに孔雀の羽根を使い、動きが大きく勇壮で男性的な踊りですが、多ノ郷や吾桑では雉などの羽根で冠を飾り、踊り方はおとなしく、優美で女性的です。

このように同じ市町村の中でも違いがあるのですから、県内ではどのような分布がみられるのか、また、隣接県との関わりなども知りたいと思います。

ところで昔は池ノ内や神田、押岡にも花取り踊りがありました。随分以前に止めています。新荘や上分の花取り踊りがなくなつたのは、ほんのこの間のこと。今の内に記録が急がれます。須崎市史で使われた史料などについても、既に所在がわからないものがあるのです。

思うに、有形、無形の文化財を後世に伝えていくには、小さなものでもいいから市町村ごとに資料館が必要です。そこに地元の資料を保存して展示することによって、住民の文化財愛護の心を育てていくことが大切でしょう。

歴史館には、さまざまなテーマの企画展を開催して、それら市町村の資料を県民に紹介してほしいものです。そんな連携が理想です。

(聞き手 中村淳子)

土佐の民具 5

箱膳と吊りそうけ

坂本 正夫

箱膳

箱膳は一人分の食器を入れて置く箱で、食事の時には膳として使用される民具です。以前の家庭では家族の箱膳が一つずつありましたが、土佐ではこれをゼンバコ（膳箱）とかオゼンと呼んでいました。

箱膳の中には各自専用の茶碗や汁碗、皿、箸などを入れていました。使用する時には蓋を裏返して箱の上に置き、中から取り出した食器を並べるので足付き膳と同じ形になります。これは一般的な箱膳ですが、中には手の込んだ朱塗りの引出し付きのものもありました。



箱膳と茶碗・汁碗・皿（本館蔵）

杉材を使用し漆塗りされていましたが、父親のものは櫟の木で作った特別なものを使用していた家もあります。太さは二五〜三五センチ四方、高さ七〜二十センチ位のもので、いろいろなものがありました。子供には小さな子供用の膳がありました。

食事の時は家族全員が囲炉裏を取りまくように定められた座席に座り、主婦が父親から順番に飯と汁を盛ります。総て盛り終わると、父親が箸をとり箱膳の前に置かれた大皿から漬物を取り、長男、次男というように順番に取って食べていました。

食べ終わると茶碗にお茶をそそぎ、まず箸を洗います。続いて汁碗、皿へとお茶を移して洗い、再び茶碗に戻して吸い込み、食器はそのまま箱膳の中に収納します。食べ残したおかずはそのまま箱膳に残しておいて、次の食事の時に食べていました。食事の度に食器を洗う習慣はなく、月に二、三回洗うだけだったので今日から考えるとまことに非衛生なものでした。

このような箱膳の使い方には「食器はそれぞれ個人に所属する」という、

日本古来の考え方が反映しているといわれています。箱膳の引出しに入れてあるヘソクリには誰も手をつけることができない、という話を西土佐村で聞きました。これも同じ考え方だろうと思います。

箱膳が使用されるようになったのは江戸時代の終わり頃からだといわれています。その後、町家でも農家でも日常のお膳として全国的に使用されていきましたが、明治後期に飯台（ちゃぶ台）が広まり大正時代の末頃から次第に姿を消しました。けれども山村や漁村、あるいは古くからのしきたりを尊ぶ老人のいる家などでは昭和時代になっても使用され、完全に姿を消したのは一九六〇年代以降のことです。

吊りそうけ

昔は今のように炊飯器や保温ジャーなどはなく、また野良仕事で忙しいので三度、三度ご飯を炊くことはできませんでした。そこで朝炊いたご飯を夜までもつように考えられたものです。夏の暑いとき、吊りそうけ（メシソウケ・メシカゴと呼ぶ所もありました）にご飯や蒸し芋、柴餅などを入れて風通しのよいところへ吊っていました。

吊っていました。



吊りそうけ（高知市立大津民具館蔵）

材料は竹です。竹ヒゴ（割竹）は、皮に近い丈夫な部分を巧みに編みでいますが、蓋と本体は編み方が異なるものもあります。把っ手がついているのは、軒下など風通しのよい適当なところへ吊すためです。大きさは大小いろいろありますが、高さが十七、八センチで径二十一、二センチ位のもものが普通です。

吊りそうけの製作には専門的な技術が必要なので特定の村の職人たちが製作し、彼らが廻村して販売したり、問屋を通じて出荷し町の荒物屋でも販売していました。

近年は昭和四十年代（一九六五〜七四）から急速に普及した炊飯器、プラスチック製の筥が一般的になり吊りそうけは姿を消しました。

子ども達と一緒に七夕行事を行ないました。

カルチャーサポーター 山崎 安津

歴史館の「子ども歴史教室」は、「ワクワクワーク」へと名称を変更しました。その第一回は、七月七日の七夕に市原麟一郎先生を招いて「土佐民話の家」で恒例の紙芝居をしました。

我々カルチャーサポーターは、七夕の日にちなで昔の七夕行事を再現してみようということで、現代の飾り付けではなく、一風趣向を凝らした飾り付けを行なうことにしました。



ワラの馬を吊って、笹には折り紙で折ったホウズキや短冊を飾るといった感じのものでした。木の杭で笹を立てて手製で編んだ縄を張れば、後は飾り付けです。

フロウ豆は、不老と書き示されるように不老長寿の意味を成していて、また田芋の葉に入れた水は、七夕の水と呼んで、イボにつけると直るという言い伝えがあるそうです。ワラの馬は、高知県の西部と東部で吊す地域と吊さない地域とに分かれていて、今回参加して下さったお客さんの中にも馬を吊すのを初めて見た人がいました。しかし、大部分の人達が、私のようにこうした昔ながらの七夕飾り自体を初めて見た人ばかりでした。

最近、昔の伝統行事を受け継いでやっていくようにする人達や地域が減ってしまい、時間や場所に制約があるため、なるべく簡潔に済ませようという考えになりつつあります。今回、子ども達に七夕本来の行事を少しでも伝えることができたのではないかと思います。七夕以外の伝統行事も子ども達に体験してもらって色々と感じてもらえるような活動を今後も行なっていきたいと思っています。

最近、昔の伝統行事を受け継いでやっていくようにする人達や地域が減ってしまい、時間や場所に制約があるため、なるべく簡潔に済ませようという考えになりつつあります。今回、子ども達に七夕本来の行事を少しでも伝えることができたのではないかと思います。七夕以外の伝統行事も子ども達に体験してもらって色々と感じてもらえるような活動を今後も行なっていきたいと思っています。

新収蔵資料紹介

木造長宗我部元親坐像

高知市 秦神社蔵

この坐像は、長宗我部元親の没後、子息盛親によって肖像画(国重文)とともに製作され、雪隠寺に奉納されたと考えられています。以来四百年あまりの間、国主交替の激動期や風水害、維新の混乱期を経て今日まで大切に相伝されてきました。全体的なフォルムは歴代の室町將軍やその重臣たちの木像によく似ていますが、表情や細かい細工については特徴があり、製作地・製作者の特定はまだできておりません。

土佐の戦国武将の彫像作品は、本資料を除いてほとんど確認されておりませんので大変貴重なものと言えます。

昨年度、県の指定文化財に指定されたことを一つの契機として、本年七月より当館で預かりし、大切に管理・保存させていただくことになりました。



資料保全の立場から、常設展示することはできませんが、十周年特別展に引き続き、秋の企画展「長宗我部元親・盛親の栄光と挫折」の際にも展示いたします。是非一度御覧ください。

歴史館十周年記念グッズとして新しい絵ハガキが登場しました。

参勤交代時の山内家主従の行列を描写したもので、藩主や供の侍の様子が具体的に描かれています。

製作年代は不明ですが、学校での学習教材としても活用していただけるよう、全場面のうち大名行列の構成がよく分かる部分五箇所を選びタイトルを付けました。

当館受付でしか購入できませんので、ご来館の折りに是非お買い求めください。

- ① 「三持ち・鉄砲持ち足軽」
- ② 「鷹匠と藩主乗物」
- ③ 「大名御召替馬」
- ④ 「御年寄(重臣)の乗物と供侍」
- ⑤ 「御狹箱を担ぐ足軽」

※行列の構成についてはよく分かっていない面もありますので他家の事例を参考にしました。

開館10周年記念グッズ登場!

土佐藩行列絵巻 絵ハガキ 5枚1組



11月から1月の催し 平成13年11月～平成14年1月

史跡めぐり

12.1

古戦場めぐり① 阿波

四国の覇権をかけ死闘を繰り広げた阿波三好氏の関連史跡、特に長宗我部氏と激しい戦闘が行われた古戦場を中心に探訪します。また近年発掘された阿波細川氏の守護館跡も見学します。定員は42名。葉書でお申し込み下さい。申し込み多数の場合は抽選になります。

講演会 14:00～16:00

11.10 秦 政博氏

長宗我部信親の見た

南蛮都市府内

戸次川合戦前後の状況を豊後大友氏の側から考察し、また長宗我部信親が戦死するまで滞在した府内の状況についても詳細に解説していただきます。聴講無料。葉書に講演日・住所・氏名・電話番号を記入のうえお申し込み下さい。(先着順)

展示室トーク 14:00～16:00

11.24 当館学芸員 野本 亮

元親・盛親の書状を読む

長宗我部元親・盛親発給文書を古文書学的に考察します。料紙の大きさや紙質、様式や花押に至る特徴から何が見えてくるでしょう。AVホールでの基礎学習の後、展示室にて一点一点解説していきます。入館料が必要です。

ワクワクワーク

12.22 10:00～12:00

もちつき

お正月の準備、師走の恒例行事もちつきを体験します。

用意するもの：エプロン、タオル

定員：先着30名。電話でお申し込み下さい。

「シンボルマーク決定！」



最優秀賞に選ばれた武市浩子さん(南国市二二三歳)の作品が当館のシンボルマークになりました。どうぞよろしく！
まわりの作品は、みなさんから寄せられた力作の一部です。











岡豊風日(おこうふうじつ) 第41号
平成十三年九月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1-099-1
TEL 088-862-2211
FAX 088-862-2110

開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は翌日)、12月28日、1月4日、臨時休館日あり

入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上) 450円・団体(20人以上) 300円
高校生以下、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名) 高知県及び高知県長寿手帳所持者は無料

http://www2.net-kochi.gr.jp/kenbunka/rekimin/
E-mail:rekimin@tosa.net-kochi.gr.jp

〈ひとこと〉
元親坐像が館内に搬入された時、どこからかいるはずのない虫が飛んできて坐像の近くにとまりました。じっとして動かない虫を見て「殿、お帰りなさりませ」っていいゅうでとA氏の一言。一同納得の一瞬でした。(野本)

シンボルマークのご応募、ありがとうございました。応募がなければ「十二単姿のくろしおくんかな？」と想像していたところ、力作がたくさん届きました。(中村)

月・日	主な出来事
7・7	土佐民話の家⑦
7・27	臨時休館
8・2	
8・3	開館10周年記念特別展「土佐・2000年」開幕
8・11	水てっぽうをつくろう
8・18	展示室トーク
8・25	坂詰秀一氏講演会
9・16	特別展閉幕
9・17	臨時休館
9・25	